

平成20年 岩手・宮城内陸地震

道路災害復旧報告書

～ 通行止めによる地域経済への影響と、道路復旧による復興の兆し ～



宮城県 土木部

目 次

1. はじめに（報告書開版にあたって）	P. 1
2. 岩手・宮城内陸地震による道路の被災状況	P. 2～3
3. 被災後の通行規制状況の変遷	P. 4～6
4. 震災（通行止め）による産業活動への影響	P. 7～10
5. 道路全面復旧による復興の兆し	
① 交通量の回復状況	P. 11～12
② 観光産業の復興状況	P. 13～14
6. 岩手・宮城内陸地震で得た教訓	P. 15～16

（付 録） 湯沢市皆瀬観光協会会長との対談録
「国道398号開通を迎えて」

1. はじめに(～報告書開版にあたって～)

平成20年6月14日土曜日の朝に発生した「岩手・宮城内陸地震」は、県内で最大震度6強を観測し、県内のほとんどの地域で揺れを感じる大きな地震でした。この地震により、多くの尊い人命が失われたことは誠に残念であり、痛恨の極みです。また、多くの道路が通行止めとなったため、孤立する集落が発生したり、産業・経済活動が停止するなど、地域生活や地域経済に多大な影響を与えました。

宮城県では、1日も早い地域の復興を成し遂げるため、通行止めとなった道路の早期復旧に全力を注ぎ、結果、2年3ヶ月という期間を要し、延べ62kmに及んだ通行規制の全てを解除することが出来ました。

平成22年9月18日の道路全面復旧時には各地で開通イベントが催され、主催者の予想を大きく上回るお客様が訪れるなど、多くの方が道路の全面復旧に大きな期待を寄せていたことが伺えました。今回の地震で大きな被害を受けた栗原西部は、栗駒山を抱える県内有数の観光地であります。「観光王国宮城」を目指す本県にとって、震災により停滞してしまった観光産業が、全面復旧によりかつての賑わいを1日も早く取り戻すことが切に望まれます。

道路は、地域生活や産業経済に深く影響する極めて重要な社会基盤であり、この資本を常に守り・育むことが、安全安心な県土づくりの基本となるものです。「生まれてよかった、育ってよかった、住んでよかった」と思える宮城県をつくるためには、何よりしっかりとした災害への備えが必要であり、今回の災害対応から得た多くの教訓を、宮城県沖地震など今後予想される大規模災害に活かしていかなければなりません。

本報告書は、道路災害復旧の足跡を通して、社会基盤の重要性を改めて認識し、今後の大規模災害への対応に活かすことを目的に作成しました。ご覧になる方々の災害に対する見識が、より一層向上することを望んでおります。

最後に、災害復旧に携わり、早期の全面復旧に向け多大な御尽力・御助力頂いた多くの方々に、心より感謝申し上げます。

平成22年11月30日

宮城県 土木部長 橋本 潔

2. 岩手・宮城内陸地震による道路の被災状況

平成20年6月14日に発生した「岩手・宮城内陸地震」は、マグニチュード7.2（昭和54年の宮城県沖地震はM7.4）という近年では希に見る大規模な地震であり、多数の人的被害が発生したほか、公共施設も大きな被害を受けた。

地震の概況と主な被災状況は下記のとおりである。

- (1) 発生日時 平成20年6月14日（土） 8時43分
- (2) 震央地名 岩手県内陸南部（北緯39.0度、東経140.9度）
- (3) 震源の深さ 約8km
- (4) 地震の規模 マグニチュード7.2
- (5) 県内各地の震度（震度6以上）
 - 震度6強 栗原市一迫
 - 震度6弱 栗原市栗駒、栗原市築館、栗原市高清水、栗原市鶯沢、栗原市金成、栗原市志波姫、栗原市花山、大崎市古川三日町、大崎市古川北町、大崎市鳴子、大崎市田尻
- (6) 主な被害状況（県内）
 - 人的被害 死亡者14人、行方不明者4人、負傷者365人
 - 住家被害 1,902棟

※上記数値は、平成22年11月30日現在の公表数値です。

今回の地震で多くの公共施設が被害を受けており（約1,095億円）、道路も多くの被害を受けた。【表-1】

【表-1】 道路の被災状況

[平成20年7月22日現在]

事業区分	被災箇所数	被害額 (千円)
県事業	132	12,706,000
町事業	146	6,436,600
計	278	19,142,600



(主) 県道築館栗駒公園線



国道398号 湯浜峠付近

震度の大きかった地域では多くの道路が被災し、通行止めとなった。（【表－2】参照）幹線道路のみならず生活道路まで寸断された地域もあり、特に旧栗駒町や旧花山村では連絡道路の全てが寸断され、栗駒耕英、花山中村、花山浅布の3地区が孤立した。

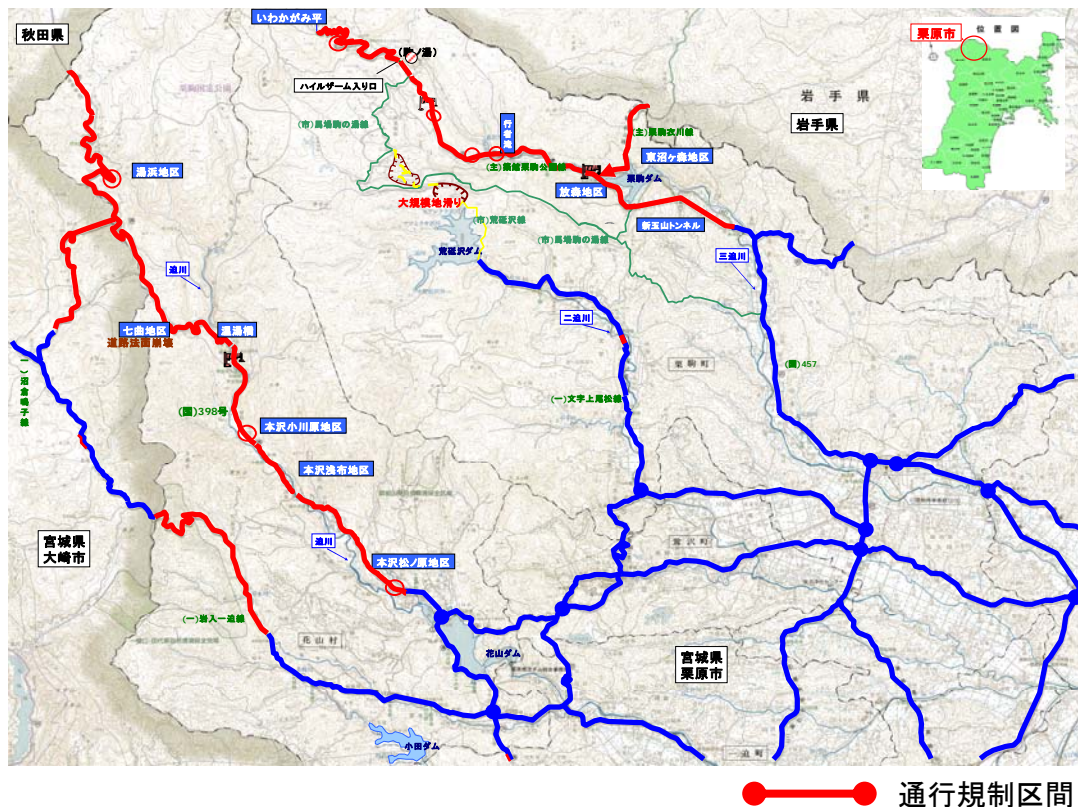
【表－2】 宮城県内の通行規制状況

	全面通行止	片側通行止	規制解除日
国道398号	25km	0.1km	H22.9.18
(主)築館栗駒公園線	18.4km	—	H22.9.17
(主)栗駒衣川線	3.1km	—	H21.12.24
(主)最上鬼首線	4.4km	—	H20.6.15
(主)鳴子池月線	—	0.1km	H20.6.19
(一)岩入一迫線	7.6km	0.1km	H22.4.20
(一)沼倉鳴子線	1.0km	—	H22.9.18
(一)文字上尾松線	0.7km	(0.2km) (H20.7.28全止解除、 片行に変更)	H21.8.10
(一)古川一迫線	—	0.1km	H20.6.16
(一)田尻瀬峰線	1.5km (大型通行止)	—	H20.6.14
規制路線数計10路線・規制箇所数13箇所・規制延長計62.1km			

* 規制延長は震災直後

被害の大きかった栗原市西部の震災直後の通行止め状況は下記【図－1】のとおりであり、中でも、秋田県との県際道路である国道398号と、栗駒山観光の主要道路である県道築館栗駒公園線については通行止め期間が長期となり、住民生活や地域経済に多大な影響を及ぼした。

【図－1】 震災直後の通行規制状況



3. 被災後の通行規制状況の変遷

宮城県では、通行止め箇所の早期解除を目指し、被災した道路の復旧工事を急いだ。その結果、通行止め区間は順次縮小、解消され、平成22年9月18日の国道398号の全面復旧をもって、全ての通行止めが解除された。

地震発生から実に2年と3ヶ月という長期の時間を要した。

以下に、通行止め解除（道路復旧）の変遷を示した。

【図一2】 H20.6.14 震災直後の通行規制状況



●—● 通行規制区間

震災直後の宮城県内においては、国道398号、築館栗駒公園線をはじめとし計10路線、計62.1kmにおいて通行規制が行われた。

幹線道路のみならず生活道路まで寸断された地域もあり、旧栗駒町や旧花山村では連絡道路の全てが寸断され、栗駒耕英、花山中村、花山浅布の3地区が孤立した。

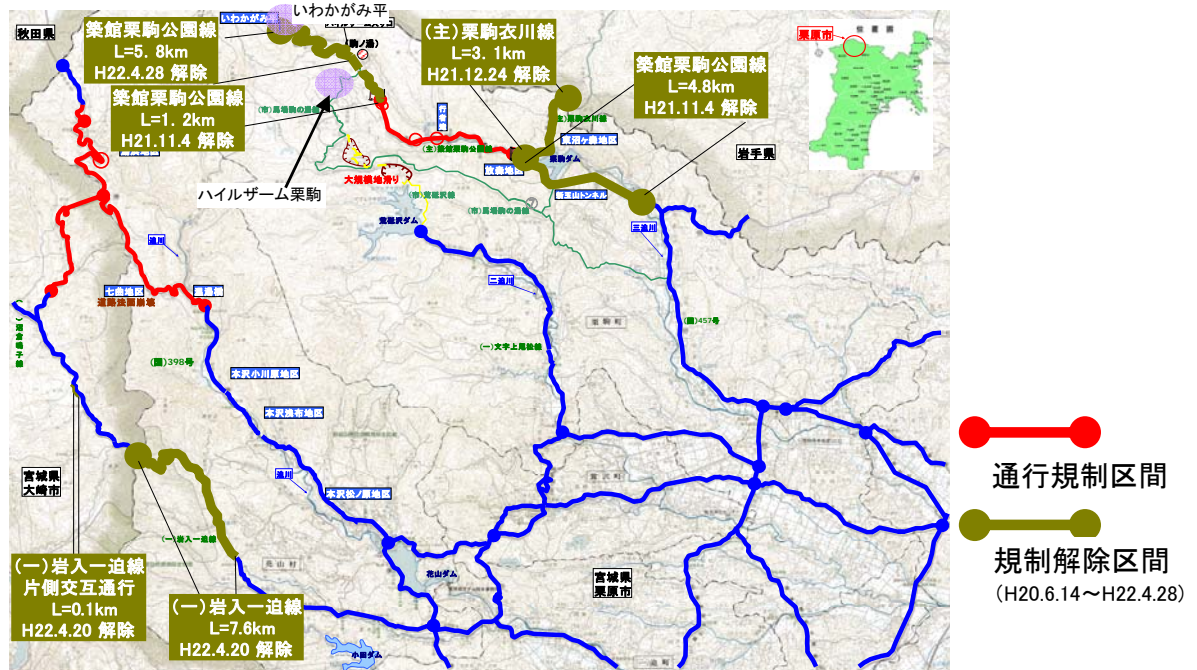
県際道路の通行止めにより、宮城—秋田間のアクセスが途絶えるなど、大きな影響が生じた。

【図—3】 H21.10.1 国道398号温湯山荘まで開通



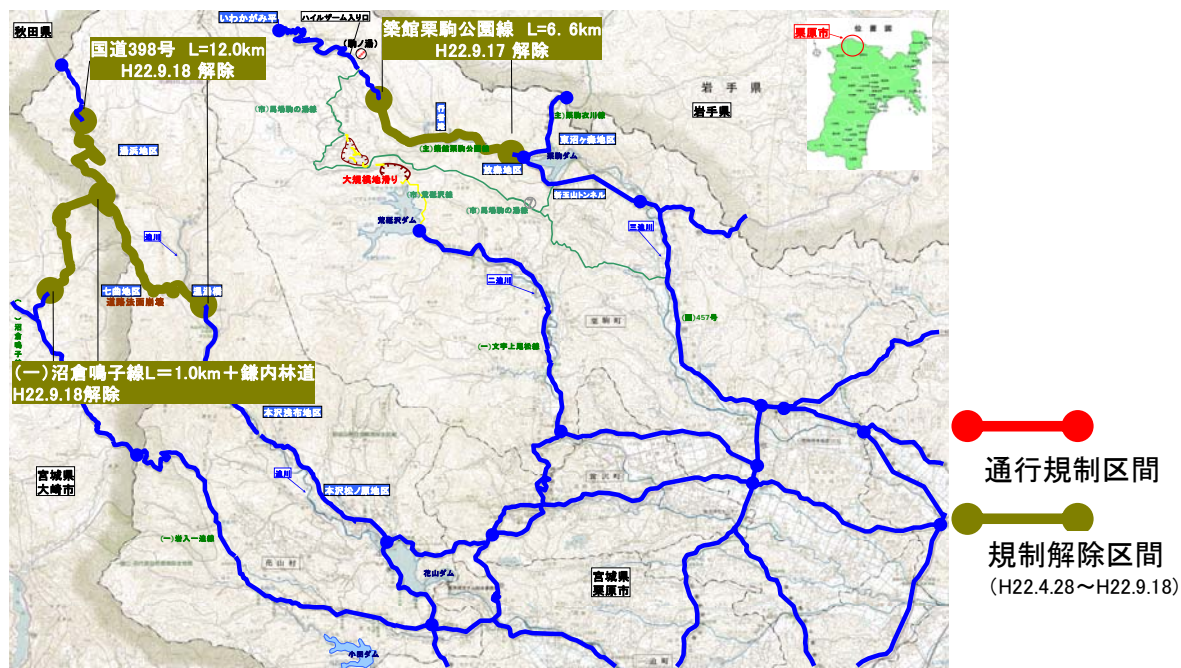
平成21年8月1日の国道398号松の原～猪の沢間5.0kmの開通により、花山中村と花山浅布の2地区の孤立が解消された。更に、平成21年10月1日に国道398号猪の沢～温湯間6.0kmが開通し、花山温湯山荘までの通行が可能となった。

【図—4】 H22.4.28 (主) 築館栗駒公園線一部区間開通 いわかがみ平までの交通可能に



平成22年4月20日、岩入一迫線の通行規制が全線で解除。
平成22年4月28日、(主) 築館栗駒公園線の栗原市沼倉耕英(ハイルザーム栗駒)～いわかがみ平駐車場までの災害復旧工事が完了し、通行規制の一部を解除したことで、栗原市道馬場駒ノ湯線を経由して、いわかがみ平までの通行が可能となった。

【図—5】 H22.9.18 全線規制解除



平成22年9月17日に（主）築館栗駒公園線が、翌18日に国道398号と（一）沼倉鳴子線が全線開通した。この開通を最後に、地震発生から続いていた全ての通行規制が解除された。

孤立集落の解消と観光施設へのアクセスルート確保を優先し、平成21年10月1日（地震発生から約15ヶ月）に温湯温泉まで、平成22年4月28日（地震発生から約22ヶ月）にいわかがみ平までのアクセスを可能とした。

全面解除は平成22年9月18日であり、地震発生から約27ヶ月の期間を要した。

災害は、大規模な地滑りや土砂崩れによるものがほとんどであり、その復旧工事は難工事となったが、早期の復旧に向け最大限の努力が注がれた。

4. 震災(通行止め)による産業への影響

道路の通行止めが相次ぎ、その期間も長期化したことは、被災地に暮らす人々や、道路を利用する人々に多大な不便をお掛けする事となった。

道路は地域住民が日常生活を送る上での生活手段として重要な役割を担っている他、物流ルートや観光ルートとして、地域経済にも大きな影響を及ぼしている。今回の通行止めは、これら産業活動を麻痺させ、地域経済に大きな打撃を与えた。特に、宮城・秋田間を連絡する「国道398号」と、栗駒山観光の主要道路である「県道築館栗駒公園線」の長期の通行止めは、地域経済に深刻な影響を与えた。

① 物流産業への影響

国道398号のような近くに代替ルートが無い単一路線の場合、迂回ルートは下図【図-6】のように大規模となるため、移動距離、移動時間の増加に伴う大きな経済損失が生じる。

国道398号は、秋田・宮城を直接連絡する数少ない路線だが、トラック協会大崎支部、栗原支部とのヒアリングによれば、幸いにして物流ルートとしてはほとんど利用されていないことが分かり、今回の通行止めが物流産業へ与えた影響はほとんど無かった。

【図-6】 国道398号通行規制に伴う迂回ルート(栗原～湯沢)



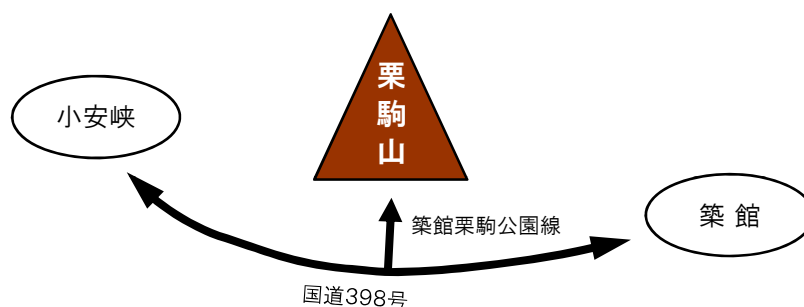
② 観光産業への影響

地震の被害が大きい栗原西部は、栗駒山観光をはじめとする県内有数の観光地であり、年間多くの観光客が訪れていた。しかし、地震発生による宿泊・観光施設の被害や連絡道路の通行止めなどにより、観光産業は深刻なダメージを受けた。

特に、栗原西部の大動脈となる国道398号と、栗駒山（いわかがみ平）へ通ずる県道築館栗駒公園線が長期間の通行止めとなったため、栗原地域の観光客数は大きく減少し、観光王国を目指し日々取り組んでいる宮城県にとって、大変大きな打撃となった。

また、道路の通行止めは観光地間の連携を大きく阻害するものであり、古くから栗駒山と関係の深かった湯沢市の小安峡温泉など、通行止めの影響は宮城県のみならず秋田県側へも深刻なものとなった。

下図【図－7】は、栗駒山を中心とした代表的な観光地や宿泊地の位置を表したもので、いずれも今回の通行止めで大きな影響が生じた。



【図－7】 栗駒山周辺の主要観光地



下表【表－3】は、【図－7】に示した観光地や宿泊地の観光客数を、震災前、震災後（通行止め中）で取りまとめると共に、通行止めの影響で減少した観光客数を推計したものである。

観光データは、宮城県の「観光統計概要」および秋田県の「観光統計」から引用した。

【表－3】 観光客数の推移と通行止めによる影響の推計

観光客数の推移

減少観光客数の推計

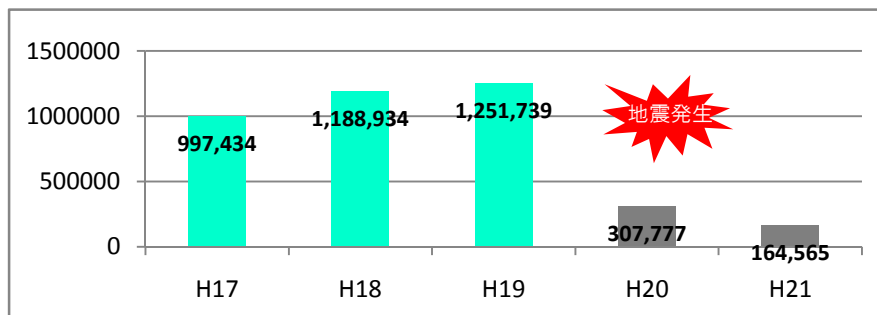
県	主要観光地点	分類	震災前			震災後（通行止め中）		月当り減少数	通行止め期間中累計
			H17	H18	H19	H20	H21		
宮城	いわかがみ平(栗駒山)	日帰客	522,100	704,520	755,800	81,800	0	62,983	1,700,541
		宿泊客	0	0	0	0	0	0	0
	道の駅「自然薯の館」	日帰客	201,750	197,440	189,066	120,015	129,866	4,933	133,191
		宿泊客	0	0	0	0	0	0	0
	寒湯御番所・ゆかりの家	日帰客	7,253	7,223	6,937	1,396	0	578	15,606
		宿泊客	0	0	0	0	0	0	0
	いこいの村	日帰客	9,818	10,132	9,768	3,695	0	814	21,978
		宿泊客	21,030	20,625	20,102	7,149	0	1,675	45,225
	駒の湯温泉	日帰客	15,039	7,453	7,177	0	0	598	16,146
		宿泊客	4,607	1,049	1,196	0	0	100	2,700
	ハイルザーム	日帰客	31,087	31,766	29,112	7,287	988	2,344	63,288
		宿泊客	26,856	22,631	20,485	6,079	686	1,650	44,550
	温湯温泉	日帰客	26,857	50,610	49,293	6,223	0	4,108	110,916
		宿泊客	14,191	10,682	12,897	4,327	0	1,075	29,025
	湯浜・湯ノ倉温泉	日帰客	0	0	577	112	12	47	1,269
		宿泊客	1,370	1,346	1,248	135	13	103	2,781
	花山少年自然の家	日帰客	26,217	16,349	34,212	14,089	0	2,851	76,977
		宿泊客	33,132	46,957	49,219	18,486	0	4,102	110,754
花山青少年旅行村	日帰客	5,324	5,553	5,559	568	0	463	12,501	
	宿泊客	4,803	4,598	4,091	1,416	0	341	9,207	
秋田 小安峡温泉	日帰客	34,822	37,850	41,635	26,495	24,981	1,388	37,476	
	宿泊客	11,178	12,150	13,365	8,505	8,019	446	12,042	
合計	日帰客	880,267	1,068,896	1,129,136	261,680	155,847	81,107	2,189,889	
	宿泊客	117,167	120,038	122,603	46,097	8,718	9,492	256,284	
	総計	997,434	1,188,934	1,251,739	307,777	164,565	90,599	2,446,173	

(単位:人)

※ 秋田県の観光統計には宿泊客数のデータが無いので、観光客数に宿泊率（旧皆瀬村としてのデータが残るH17年度の数値「24.3%」）を乗じた値を「小安峡温泉」の宿泊客数とした。

※ 「月当り減少数」は、直近通常値であるH19年間実績と、通行止めによる通年異常値であるH21年間実績との差分を12ヶ月で除したものの。

※ 「通行止め期間中累計」については、月当たり減少数に通行止め期間の27ヶ月を乗じたもの。



地震発生前の平成19年の観光客数に対し、地震後（年間通して通行止めであった）の平成21年は**13%程度**にまで減っており、地震、特に通行止めの影響がいかに大きいかが伺える。

平成20年は、宮城県が大型観光キャンペーン「仙台・宮城デスティネーションキャンペーン」を初めて単独開催した年でもあり、観光PRや誘客に力を入れていた矢先の地震発生であったため、大きな打撃となった。

観光客数の減少による経済損失額は、下記の試算によると**直接効果分だけでも221億円、波及効果を含めると約352億円**となる。これは、栗原市の年間歳出規模にほぼ匹敵する非常に大きな額であり、通行止めによる地域経済への影響は極めて大きく、改めて道路の重要性が認識される。

減少観光客数の分類分割

【表-3】で求めた通行止め期間中の減少観光客数を、分類ごとに分割

延べ観光客数 2,446,173	日帰り観光客 2,189,889	→	県内	$2,189,889 \times (83.7\%) \div (1.23)$	1,490,193
			県外	$2,189,889 \times (16.3\%) \div (1.29)$	276,707
	宿泊観光客 256,284	→	県内	$256,284 \times (28.8\%) \div (1.18)$	62,551
			県外	$256,284 \times (71.2\%) \div (1.45)$	125,844

※ 県内・県外の別は、延べ観光客数に県内客・県外客の比率を乗じ、更に平均訪問地点数で除して求めた推定の実人数

※ 県内客・県外客の比率と、平均訪問地点数については、直近通常値であるH19年間実績による数値を採用

観光消費額(経済損失額)の推計

上記で算出した観光客の分類ごと実人数に、1人当りの平均消費額を乗じて、経済効果額（経済損失額）を算出

分類		実人数 A (人)	平均消費額 B (千円)	消費額 A×B (億円)
日帰り客	県内	1,490,193	7.0	104
	県外	276,707	11.1	30
宿泊客	県内	62,551	32.4	20
	県外	125,844	53.4	67
合計				221

※ 旅行者1人当りの平均消費額は、直近通常値であるH19年間実績による数値を採用

宮城県統計課公表の平成17年度産業連関表の経済波及効果分析ツールを用い、上記の経済損失額を直接効果額と想定し、波及効果額を算出

第1次波及効果(生産誘発額) 約75億円
第2次波及効果(生産誘発額) 約56億円

5. 道路全面復旧による復興の兆し

2年3ヶ月という長期間に及んだ道路の通行止めも、平成22年9月17日に県道築館栗駒公園線が、翌18日に国道398号と県道沼倉鳴子線が全面開通したことにより、ようやく震災前の道路状況に復旧することが出来た。

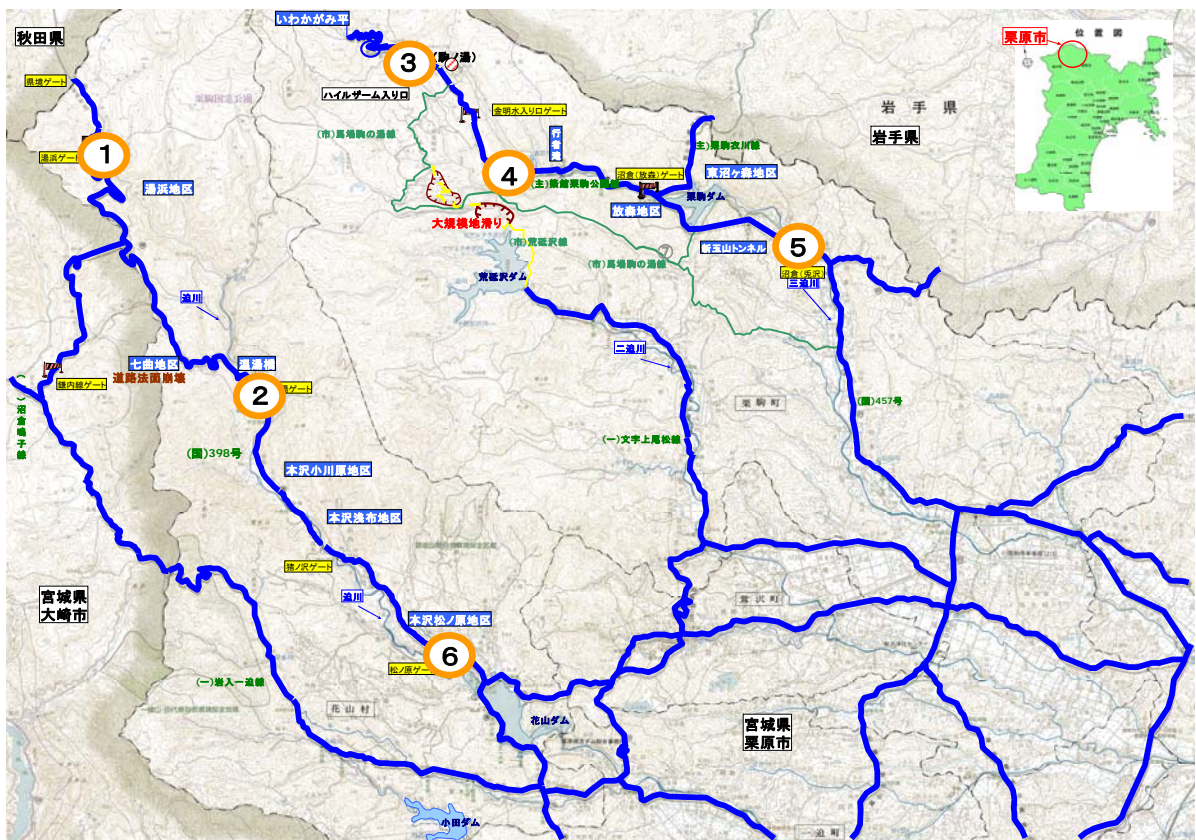
道路の全面復旧に伴い、交通量、観光客共に、徐々に回復の兆しを見せている。以下に、全面復旧後の交通量の状況、観光客数の状況を示す。

① 交通量の回復状況

秋田県との連絡道路であり栗原西部の大動脈でもある「国道398号」と、栗駒山観光の主要道路である「県道築館栗駒公園線」の2路線について、開通直後の平・休日と開通1ヶ月後の平・休日に交通量を調査した。どちらも長期間通行止めとなっていた路線である。

交通量調査は【図-8】のとおり、各路線3地点、合計6地点で実施した。調査時間は午前7時から午後7時までの12時間交通量。観測結果は【表-4】のとおり。

【図-8】 交通量調査位置図



交通量調査箇所

【表－4】 交通量観測結果

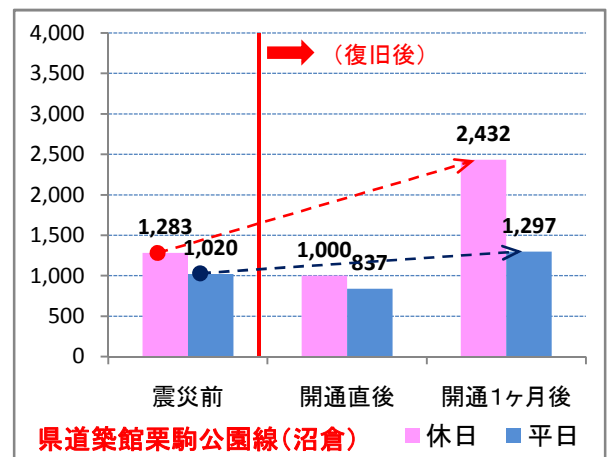
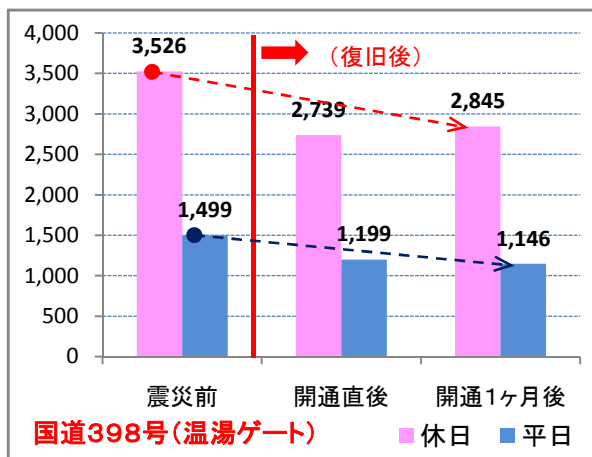
休日交通量

路線名	調査地点	震災前 H17センサス 台数計(a)	震災後(道路復旧後)			
			開通直後【9/19(日)】		開通1ヶ月後【10/17(日)】	
			台数計(b)	伸び率 (b/a)	台数計(c)	伸び率 (c/a)
国道398号	① 湯浜ゲート	—	2,244	—	2,536	—
	② 温湯ゲート	3,526	2,739	(78%)	2,845	(81%)
	⑥ 松ノ原ゲート	—	3,672	—	3,564	—
(主) 築館栗駒公園線	③ いこいの村	—	639	—	2,296	—
	④ 金明水入口	—	998	—	2,555	—
	⑤ 沼倉(兎沢)	1,283	1,000	(78%)	2,432	(190%)

平日交通量

路線名	調査地点	震災前 H17センサス 台数計(a)	震災後(道路復旧後)			
			開通直後【9/29(水)】		開通1ヶ月後【10/20(水)】	
			台数計(b)	伸び率 (b/a)	台数計(c)	伸び率 (c/a)
国道398号	① 湯浜ゲート	—	710	—	772	—
	② 温湯ゲート	1,499	1,199	(80%)	1,146	(76%)
	⑥ 松ノ原ゲート	2,165	2,275	(105%)	2,200	(102%)
(主) 築館栗駒公園線	③ いこいの村	—	322	—	550	—
	④ 金明水入口	—	715	—	876	—
	⑤ 沼倉(兎沢)	1,020	837	(82%)	1,297	(127%)

※ 震災前の「H17センサスデータ」は、10月2日(休日)、10月6日(平日)の観測データ



※ 上記グラフは、各路線とも、震災前データと比較可能な代表観測地点のデータによるもの

「国道398号」については、震災前交通量の約8割程度の交通量となっており、順調に回復する傾向が伺える。

観光道路としての性質が強い「県道築館栗駒公園線」は、震災前交通量を大きく上回る交通量となっている。本格的な観光シーズンを迎えると共に、「伊達な旅」による観光PRなども影響し、休日交通量は約2倍近い数字となっている。

② 観光産業の復興状況

震災の影響を強く受けた栗原西部地域における、宿泊観光客数の状況は【表－5】のとおり。

データは、観光シーズンである秋期（10月期）における主要宿泊施設の宿泊客数データであり、震災前（H19）、震災後の通行止め期間中（H20、H21）、道路全面復旧後（H22）の各データを比較した。

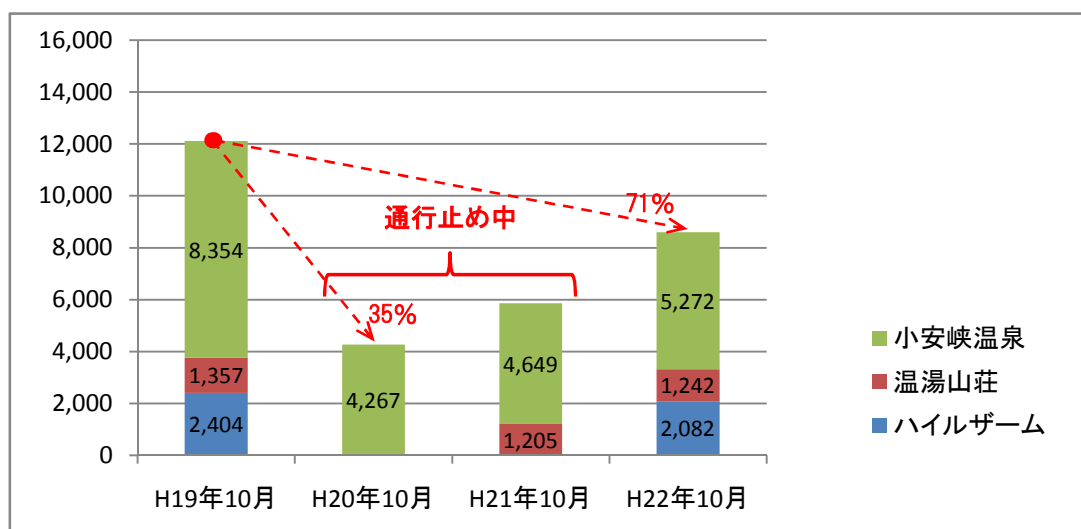
【表－5】 繁忙期における宿泊観光客数の推移

県	主要宿泊施設	震災前	震災後					
			（通行止め中）		（道路復旧後）			
		H19年10月	H20年10月	H21年10月	H22年10月	H22年10月		
宮城	ハイルザーム	2,404	0	0%	0	0%	2,082	87%
	温湯山荘	1,357	0	0%	1,205	89%	1,242	92%
秋田	小安峡温泉	8,354	4,267	51%	4,649	56%	5,272	63%
合計		12,115	4,267	35%	5,854	48%	8,596	71%

※ 表中の「%」は震災前データ（H19年10月）に対する比率

※ 宮城県のH19、H20の数值は「観光統計」のバックデータから引用、H22の数值は市町村集計の速報値

※ 秋田県（小安峡温泉）のデータは、湯沢市まるごと売課提供のデータ



通行止め期間中は、震災前の半分以下にまで宿泊客数が減少した。特に宮城県側では、連絡道路の全てが通行止めとなり休業を余儀なくされた施設が数多く発生した。

道路復旧の進捗に伴い、観光客数には徐々に回復傾向が見られる。全面復旧後のデータでは、震災前に比べて宮城県側では9割程度、秋田県側では6割程度の回復状況が伺える。

湯沢市皆瀬観光協会会長の伊藤多郎兵衛氏の話（別添「対談録」）でも、震災前からとも減少傾向であった大型観光バスが、道路復旧後は逆に戻って来ており、小安温泉の10月の予約状況は好調とのことで、確実に明るい兆しが見えている。

道路全面復旧後は、連日、栗駒山を訪れる観光客の姿が報道され、道路の全面復旧を多くの方が待ち望んでいたことが伺える。「いわかがみ平」の10月期の観光客数は45,000人（観光統計速報値）を数えており、かつての賑わいが戻ってきている。

栗原市の独自観測では、道の駅「路田里はなやま」の10月11日の観光客数が1万人を突破する観測史上の最大値を記録しており、国道398号沿線の商店では商品が売り切れとなるところも出ているとの報道もある。秋田県側でも、小安峡の産直施設「あぐり館みなせ」の観光客数が道路復旧前の1.5倍になっているとの話があり、週末の駐車場はいっぱいの状況となっている。

道路の全面復旧により、観光産業は着実に復興しており、ケースによってはむしろ震災前をも上回る盛況ぶりが伺える。

震災により、テレビ、ラジオ、新聞など、連日盛んに被災状況が報道された。被災直後はこのことが過大な風評にもなり、観光産業が少なからずダメージを受けた。一方、この過剰な報道が、栗駒地域の観光地としての知名度を全国的に大きく向上させたことも事実であろう。震災前にはほとんど見かけなかった遠隔地ナンバーの車が、道路復旧後は良く見かけるようになるなど、その効果が顕著に表れはじめている。

11月22日に行われた栗原市長の記者会見では、栗駒山麓4市村（栗原・一関・湯沢・東成瀬）により、広域観光連携を推進する連絡会議を年明けに設置することが発表された。震災が、地域振興の新たなステップアップのきっかけとなった出来事である。

俗に「災い転じて福と成す」とのことわざがある。震災が、観光地としての知名度アップや、観光振興に向けた取り組みの積極化など、様々な福に転じ、将来、地域に暮らす全ての人々の幸せにつながることを、切に期待するものである。

6. 岩手・宮城内陸地震で得た教訓

岩手・宮城内陸地震は、近年県内で大きな被害をもたらした三陸南地震（H15.5.26、M7.1）や宮城県北部地震（H15.7.26、M6.2）を上回る大規模な地震であり、未曾有の大災害となった。

土木部では、土木部災害対策本部を設置すると共に、災害復旧特別チームを組織し、被災施設の早期復旧に努めた。



結果、2年3ヶ月という期間を要しはしたが、大きな2次災害等もなく、道路の全面復旧を成し遂げることが出来た。



今回の災害対応を通して、職員個人として、あるいは組織として、多くの事を学び、あるいは改めて認識したところである。

山間部の一道路といえども、代替路が無い場合は、地域生活や地域経済に深刻な影響を及ぼす。いかなるときも、迅速・的確な災害対応が必要であり、組織は常にそのことを念頭にして、十分な備えをしておかなければならない。

また、初期の災害対応では、情報の収集と発信が非常に重要となる。必要な情報を早期に取得し、迅速な災害対応に活かすと共に、取得した情報から市民が必要とする情報については、タイミング良く正確に発信することが求められる。

道路復旧後に湯沢市皆瀬観光協会の伊藤多郎兵衛会長と対談（別添「対談録」）した際、会長から次のような貴重なお話を伺った。

「今までは、何もしなくても客は来ると思っていた。目の前の道路は常に車が走るものと思っていた。今回の地震でそうでは無いと気付かされた。リピーターのお客さんがいかに大事か、情報PRなどの地道な努力がいかに大事か、他の観光地との連携など、観光産業の広域的展開が今後いかに重要であるかなど、多くのことに気付かされた。今回の地震は被災地域で暮らす人々にとって大変つらい経験であった事は事実だが、反面、貴重な経験ともなった。」

災害は多くの人命・財産を奪い、暗く重たい記憶として残る。しかし、伊藤会長の言葉にあるように、そこから得られる貴重な教訓もある。宮城県も今回の災害対応で多くの事を学んだ。

この貴重な経験と教訓を長く維持・継承し、宮城県沖地震など、来たるべく大規模災害への備えに大きく活用していく。



～～ おわり ～～